

# 小池真理子さん

インタビュアー・構成／会報編集・郡司 武  
写真／水村 孝

場所提供／星野リゾート 軽井沢ホテルプレストンコート



## 自分の意思で幕を下ろす それは最後の自由なのではないか

初めての夫婦での直木賞作家として話題を集めた小池真理子さんと藤田宜永よしながさん。2年前、「かたわれ」と呼ぶ藤田さんが69歳で肺がんで逝く。

見送ったその心の揺らぎ、振幅、喪失感を丹念に綴った『月夜の森の梟』（朝日新聞出版）が大きな反響を呼ぶ。30年以上住む長野県軽井沢に小池さんを訪ね、その反響のあれこれ、夫との最期の日々、尊厳死などについて聞いた。

—— 軽井沢、緑がきれいですね。

小池 ほんと、今が最高ですね。

—— さっそくですが、『月夜の森の梟』、売れているようですが、読者から様々な感想が寄せられていることと思いますが、どんな内容ですか。

小池 朝日新聞の「be」に連載をスタートしたのが2020年の6月。藤田が亡くなったのは1月ですので、5か月後でした。最初の2、3週は私にまだ、書く方法論のようなものがなく、こなれていなかったもので、読者の方もそのように読まれていたと思います。ところが7月になり、編集部経由で転送されてくるメール、ファツ

クス、手紙が、あつと言う間にものすごい量になりました。

—— 多くは死別経験者の方々ですか。

小池 最初のころは死別に限らず、何か精神的に満たされなくて、孤独で、何を失ったのかは分からなけれど、喪失感とか孤立感、悲哀を抱えながら生きておられる女性が多かった印象です。家族の前では読めない、一人になれる場所に持って行って読んで、涙するのが習慣になりました、と書いてこられる方も多数いました。

—— 喪失感を抱える多くの方々  
の琴線に深く触れていったということですね。

小池 そうだったんだろうと思います。回を追うごとに死別体験を

部分が触発され、気づかされ、共感し、共鳴し、そしてやがて、少しずつ癒されていく、ということなんでしょうね。

「心の中を吹き抜けていく  
風の音を言葉にしよう」

小池 この連載を始めるにあたって、死別の悲しみをどのようにして乗り越えたいのか、という方法論のようなものを書く気はまったくなかったです。いろいろな意味で、作家としての「企み」のようなものはゼロでした。彼の闘病と死を通り過ぎた先の「脱け殻」みたいな状態の、そんな自分自身の心の中を吹き抜けていく風の音であるとか匂いとかを言葉にしていこうと、ただそれだけでした。それ以外のことは考えられなかったです。

—— 読者は、そこをよくわかってくれたということでしょうね。

小池 そうですね。私が表現したことをありのままに受け止めてくださったんだと思います。

—— 先日、小池さんの『死の鳥』

家族の前では読めない、  
一人になれる場所に持って行って読み、  
涙する、と書いてきた方が何人もいました

を借りて文京区の図書館に行った際に、『月夜の森の梟』について聞いたところ、区内の分館を含めて9冊入っていて、今90何番待ちです、と言われました。

**小池** え、ほんとに？そうですか。——1つの社会現象に近いと言っているかもしれませんね。ちょうどコロナ禍のなか、いろいろな断絶感、孤立感、喪失感を抱えながら小池さんの連載を毎週待ち望む姿が浮かび上がってきますよね。

### 「父はある面『苦痛』ではなかったか?」

——小池さんは2009年にお父さんを、その4年後にお母さんを亡くされています。お父さんはどのような最期でしたか。

**小池** 父をモデルにして『沈黙のひと』という長編小説を書きました。父はパーキンソン症候群だったんです。85歳で亡くなりました。70代の半ばくらいから歩行がおぼつかなくなり、そのうち声にも症状が出るようになっていました。

ですが、天井まである木製の本棚に、本がびっしり並んでいました。生まれた時から、本に囲まれていた感じでした。

——お父さんは、小池さんが作家として華々しくデビューし、直木賞をとられたりしたのを相当喜んでおられたでしょうね。

**小池** 父が一番喜んでいましたね。



話そうとすると烈しい吃音になるんですね。「まりこ」と言えずに「ま、ま、ま、まりこ」という具合に。初期のころは、ワープロを使えば細かな意思疎通が可能でした。でも、だんだん手の震えが烈しくなると、キーボードが打てなくなつて。施設に入つた後は私が「あいうえお」を使った「文字表」を作つて、それを指し示してもらいながらのコミュニケーションしかできなくなりました。指先が震えるので、ひとつの単語を示すだけでも、途方もなく長い時間がかつたものです。

——ごきょうだいはい？

ただ、私のデビュー作が『知的悪女のすすめ』という、勇ましいタイトルのエッセイ集で、中身も父が想像していたのとまったく違つたので、父はショックのあまり、熱を出して寝込んでしまったことがあります。

——ハハハ、そんなことがあつたんですか。

### 死別の悲しみをどう乗り越えたらいいのか、ということを書きたかつたのではない。

### その種の『企み』はまったくなかつたです



#### こいけ・まりこ

1952年、東京生まれ。作家。成蹊大学文学部を卒業後、78年にエッセイ集『知的悪女のすすめ』を刊行、ベストセラーとなり、後に小説を書き始める。84年から藤田宜永と夫婦となり、2020年に藤田が亡くなるまで36年間をともに暮らす。その間、1995年に『恋』で直木賞。藤田も2001年に直木賞。初めての夫婦での直木賞受賞として話題に。代表作に『虹の彼方』『無花果の森』『沈黙のひと』『モンローが死んだ日』『死の島』『月夜の森の梟』『神よ憐れみたまえ』など。1990年に藤田とともに長野県軽井沢に移住し現在に至る。

**小池** 8歳下の妹が一人います。姉妹で協力し合えたのは何よりだったと思っています。両親の状態が悪くなってからは、私も頻繁に上京して、実家や施設に通っていました。

——そうでしたか。出版社との打ち合わせなどもあるでしょうから、大変でしたね。お母さんは、その頃は？

**小池** 母は認知症が進み、父が入所していた施設に、少し遅れて入りました。父は認知症にはなつていなかった分だけ、「苦痛」が大さかたつたように思います。大正生まれで、東北帝大(現・東北大)

### 「私は衝撃のあまり泣きだしたのを覚えてます」

——小説『死の島』について伺いますが、誰かモデルはいるんですか。

末期のがんに侵された69歳の元編集者が、自死という「尊厳死」を遂げるまでの、真に迫る物語でした。

**小池** モデルはいません。当時、「藤田さんがモデルではないか」と言われましたが、書き始めたのは2016年で、そのころ藤田に病気の兆候はまったくありませんでした。単行本として刊行された2018年3月に藤田の肺がんが発覚し、それも主人公と同じように手術ができない末期がんでしたので、そう思われたのだと思います。

を出た、いわゆる当時の典型的なインテリでした。ロシア文学やドイツ文学に傾倒していましたし、プライドがとてつもなく高かった。施設の方から赤ちゃん言葉で声をかけられて、みんなと一緒に「お遊戯」をすることを嫌悪していました。一人前の男として扱ってもらえない「苦痛」とでもいいでしょうか。

——なるほど。よくわかりますね。

**小池** 「乖離」ですよ。高齢で体が不自由になって、まともに話せなくなった老人を扱おうとする時の社会の有り様と、実際の本人との間にある、もの凄いく乖離……。医療関係者も忙しいので、コミュニケーションをとりにくい老人とは、そうそうゆっくり付き合えない。それはわかるのですが、父を見ていて可哀そうでなりません。した。

——小池さんが文学の道に進まれたのはお父さんの影響でしたか。

**小池** そうですね。三歳ころまで、中野(東京)にあった社宅の二階の、ひと間の部屋に住んでいたん

——小説は大手出版社の元編集者がカルチャーセンターで教えているという設定でしたから、たしかにモデルがいるのかと思いました。

**小池** いやいや。出版されてから「あれって、オレのこと？」みたいに冗談交じりに聞いてきた人はいましたけど。

——ハハ、そうでしたか。ところで藤田さんは、がんが発覚した時に医師にどう言われたんですか。きちんと正面から病状を伝えられたんですか。

**小池** 医師は本人にはっきりと「余命は年内いっぱい」と告げました。藤田は呆然としながらも、なんとか受け止めていましたが、私は衝撃のあまり、診察室で倒れそうになりながら泣きだしたのを覚えてます。

——お辛かつたでしょう。

**小池** 告知を受けた後、二人で考えたのは、社会とのつながりを一切絶つて、どうやって近づいていく「死」を受け入れ、生きていくか、「死」を迎えるかということでした。彼はすべての仕事をやめ、

私も、どうしても書かなければならない連載以外は断って、ほとんどの時間を彼の闘病のために使いました。

——ところで、尊厳死<sup>①</sup>ですが、あなたためてきたテーマなんですか。

**小池** 父が亡くなった2009年ころだったと思いますが、尊厳死・安楽死をテーマに書いてみようと思うようになりました。体を動かせなくなった父が衰えていく様をずっと見てきたので。「自分の人生の幕引きは自分で行いたい」と、ある種、文学性を持っている人間だったら思わずにはいられないことって、たくさんあるよな気がします。オランダなどでは尊厳死・安楽死について法的に認められている、ということを知って、自分の意思で自分の人生に幕を下ろすというのは最後の自由なんじゃないか、という想いが強



くなりました。それを小説の中で表現してみたいと思ったわけです。

### 「尊厳死協会に入ったのよ」と資料を見せられ

——なるほど。小池さんはご夫婦で2019年6月に、うちの尊厳死協会に入会されています。どんなきっかけだったんですか。

**小池** 2018年3月末、藤田の肺が見つかった、まさにその日でした。文芸誌で作家の篠田節子さんと対談したんです。私

が『死の島』を出版したことで彼女が乳がんであることをカミングアウトするという趣旨で、その対談中に、篠田さんが「ねえ、見て見て。私、尊厳死協会に入ったのよ」と言っている。資料を見せ

てくれたのですが、その直後、藤田の肺の検査結果を知らせる、かかりつけ医師からの電話を受けたんです。尊厳死協会と夫のがん発覚が、ワンセットになった日でもありました。

——そうでしたか。入会はその対談の翌年になりますね。

**小池** 最先端の免疫治療薬が藤田の体に合って、一時期は寛解するかもしれないというところまでいったんです。でも、希望は長く続きませんでした。そのうちリンパ節に次々と転移し始めて。「尊厳死協会に入っておこう」と2人で話し合って、2人で入会しました。——その1年後に藤田さんが亡くなられたわけですね。

**小池** ええ。がんが発覚してから1年10か月の闘病でした。「自宅で死にたい」というのが藤田の強い希望でしたが、最後の1日は、在宅では難しくなって入院せざるを得なくなりました。よほど病院がいやだったのか、呼吸が止まったのは、入院した数時間後のことでした。

——うーん。今日はまだお気持ちの整理もつかない中でのインタビューとなりました。お受けくださり、ありがとうございました。

### インタビュウを終えて

星野リゾート発祥の地にある軽井沢のホテルは、さわやかな緑の中にありました。ゆったりと流れる時間の中で、小池さんは夫との最期の日々を、静かに、言葉を噛みしめるように語ってくれました。末期がんを告げられて思ったのは「どうやって二人で『死』を覚悟しながら生きていくかということでした」と話す透明感のある若々しい声が、まだ耳に残ります。

会報編集・郡司 武

### そのとき思ったのは、

どうやって社会とのつながりを絶ち、

『死』を迎えるかということでした